

## つながりを意識して読む力を育む

### 1. 研究テーマ設定の理由

#### (1) 学校提案とかかわって

国語科では、「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿を、作品を読み、その内容を追究していく中に見出していく。作品内容を追究する際、子どもたちは、作品中の言葉の意味やはたらき、文と文、言葉と言葉のつながりを考えることになる。感動、共感、反発など、作品に対して、自らの思いや考えを頭の中に巡らせながら読み進めていく。そのような経験を積み重ねることで、子どもたちは言葉に着目し、自らの中に言葉を蓄積させ、その言葉を活用していく力を身につけていくであろう。

これまでに、国語科部では、対象、他者、自己との3つの対話を重視してきた。昨年度は、子どもたちが教材や他者、自己の学びに関わって学びを深めていける言語活動の充実を図るべく、「学び合いを支える言語活動」をテーマとし、学習意欲やつけたい力を大切にしたい言語活動を提案してきた。問い続け、学び続ける子どもたちの姿を目指すためには、子どもたちが自ら問いを生み出せるような学習展開にしていく必要がある。

そこで、国語科では本年度、「つながり」を1つのキーワードとして研究を進める。ここでいうつながりとは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりを指す。これらのつながりを、子ども自身が意識しながら読む力を育みたい。

#### (2) 国語科でめざす子ども像

互いに認め合う中で表現することを楽しみ、言葉にこだわりをもち、自分らしい言葉が使える子どもを目指す。そのために、以下のような子どもたちの姿を期待している。

##### ①主体的に読もうとする子

主体的に読むとは、進んで本を手にとり読む姿だけでなく、作品を読んで「大事だな」と思う言葉や文章に注目し、そこに立ち止まって問いをもつことである。子どもたち自身が「読みたい」という思いをもって作品に向かい、学びを進めていける子を育てていく。自分自身や生活、経験に引きつけるなど、主体的に学びに取り組むことにより、学習意欲が継続し、著者の思いに触れることができる。そのことにより自分の言葉が洗練され、想像力が高まっていくものと考えている。

##### ②関わり合いを大切にできる子

教室が子どもたちの学び合いの場になっているか。子ども同士のつながりがある授業であったか。子どもたちが、友だちの読みについて知り、友だち、教師、教材と関わりながら、自分の読みとのつながりについて考えることができるよう学習を進めていく。

##### ③学びの振り返りができる子

対象、他者との対話において、自分とのつながりを意識し、身につけた表現を駆使し自分の中にもった思いや考えを表現することができるようにしていく。自分の認識がどのように変容したかを実感できることが重要である。

## 2. 国語科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

低学年	中学年	高学年
教師と共に単元全体を見通し、課題に向かって学習を進める。自分の思いや考えを伝えたり、友だちの思いや考えを知ろうとしたりする。	単元全体を見通し、教師と共に課題を探り、課題に向かって学習を進める。友だちと自分の思いや考えを比べながらきき、気づいたことを伝えたり、自分の考えを深めたりする。	学習経験をいかしながら、単元全体を見通し、自ら課題をもって学習を進める。多様な考えに進んで関わり、対話を通して自己の変容に気づく。

単元を進めていく中で、子どもと教材、子どもと子どもがどうつながっていくかをみとる。ノートやワークシート、発言、授業の振り返り作文、座席表などから、子ども一人一人の読みをみとる。それぞれの読みをつかんでおき、指導のねらいに即して、子どもと子どもの読みをつなげられるような発問や切り返しに生かす。また、子どもの疑問や考えをみとり、子どもたちが気づいていないことに気づかせていくための教師の働きかけを考えたい。ペアやグループで、どのような話し合いになっていくか予想しておいたり、どのような話を期待したいかを考えたりしておき、ペアやグループへの支援にも生かしたい。

### 2年生実践「スイミーになりきって音読！『スイミー』の海をおよごう」より

#### (1) 学びのつながりを意識させるための支援

学びのつながりをもたせるための支援の1つとして、掲示物の活用がある。教材文、挿絵、作者、重要語句、関連書籍についてなどを掲示する。学びの足跡を、足跡に終わらせず、授業の中で活用できるようにしていくことが必要である。

写真①は、教師（写真中央）が、前時に学習したことについて、教室掲示を活用しながら話している場面である。写真②では、その次の授業で、子どもが、教室掲示を活用して話している。①のようにして、教師が学習内で活用していくことにより、子どもたちは学習の仕方をも学ぶ。そして、②の姿が見られるようになった。このときには、②の児童の姿を全体の場で誉める。そうすることにより、掲示物を使うこと、ひいては学習のつながりを意識しながら学んでいく芽を育てていくことができる。



写真1

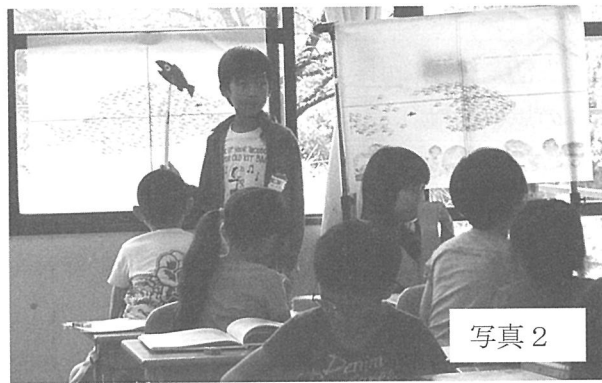


写真2

(2) 第6時（スイミーのとそっくりの小さな魚のきょうだいたちとお話しよう）授業記録より  
スイミーが赤い魚のきょうだいたちを見つけ、マグロを追い出すまでを読む授業である。

T	昨日、海を冒険しましたね。何を見たかな。	—
C	（お魚）（うなぎ）（いそぎんちゃくと、わかめの林）	
T	冒険をしていたら、スイミー階段が見つかったね。スイミー階段を昇っていくように元気を取り	

戻していききましたね。でも、ひろ君が、あそこ（いそぎんちゃくを見たところ）が最高じゃないよって言っていました。……①

C （みんなが会えたところが最高。）

C （うん。）

C （違うよ。）

なおと 魚たちが集まって1つになったところ。

ゆうた 大きな魚を追い出したところ。

T （挿絵を指して）ここでは、そのとき、何を見つけた？

C （小さな魚のきょうだいたち。）

T 小さな魚のきょうだいたち。見つけましたね。なおと君はそこじゃないと思うの。……②

なおと あのさ、なんかさ、大きな心を1つみたいなの、そこ（挿絵を指す）心がつながったみたいなの。

T 今、なおとくんの言ったこと聞いてください。

なおと 心が1つになった感じ。

T そんなふうに感じたから、スイミー階段の最高だって思うんだ。

としき 大きな魚を追い出したところ。

T あ、ここじゃないの。

としき うん。

T こっちなんだ。（挿絵を指す）ここじゃないかなって思うって。

ゆうと （あ、ぼくは、としき君の方と思う。）……③

前時で、たくさんすばらしいものを見て元気をとりもどしていった様子を読み、スイミーの紙人形をだんだん上がっていくようにホワイトボードに貼ると、ひろが、「スイミー階段だ。」と言った。さらに、ひろは、「でも、そこ（最後に見たいいそぎんちゃくのところ）が最高じゃないよ。」と続け、数人の子どもたちが「そう、違うよ。」とつぶやいた。そこで授業を終えていた。

本時でも、授業の始め①に、教師からその話をした。そのことにより、本時のねらいである、赤い魚のきょうだいたちと出会い、大きな魚を追い出す作戦を考え、ついに追い出すところまでの場面の様子について想像を広げられると考えたからである。子どもたちは、やはり「うん。」や「ちがうよ。」「◎◎のところ。」とつぶやきはじめていた。前時に話題に出た、スイミー階段の一番上はいったいどこにあるのかという点に子どもの課題意識があった。そのことについて、子どもたちは次々と自分の考えを述べ始めている。これは、まさに、問い続け、学び続けようとする姿であったと言える。

②は、①の後のつぶやきで、「みんなが会えたところが最高」に対して、なおとが同意していたことと、小さな魚のきょうだいたちを見つけたところが話題に上ったときに首を振る様子を見とり、なおとには自分の考えを話す準備ができていると考え、指名した。なおとに続き、としきも考えを話すことで、③でゆうとが、自分とはとしきの考えと同じであると言った。これは、ゆうとの中にも、課題意識があり、話を聴いて自分の考えを整理していった上で出た言葉であろう。

### 3. 研究の展望

#### （1）つながりを意識した言語活動

問い続け、学び続ける子どもたちの姿が見られるような充実した学習にするために、単元を貫いて言語活動を位置づける。言語活動を単元の一部にしか位置づけず、前後で関連のない別の言語活動を行うのでは効果は上がらない。子どもの興味、関心に寄り添い、高めさせながら、指導のねらいに応じた学習を展開していく。子どもたちが学習の見通しをもてるようにし、意欲的に学習に取り組み、その意欲を持続させることができるよう、具体的な目的や必要に応じた言語活動を設定する。

本年度は、子ども同士のつながり、子どもと教材とのつながりが生まれるような言語活動についてより研究を進める。個の学びを深めるために、子どもたちが「他の子はどう思うのか、きいてみたい」「自分の読みをきいてもらいたい」という思いをもつなど、人との関わり合いが自然となるような活動を取り入れていきたい。また、何度も教材文へ立ちかえる必然性をもたせたい。教材の魅力を感じ、自らの学びのために教材を読む必然性のある言語活動にする。

そのようにして活動することを通して、つながりながら学ぶ良さを、子どもたちが感じられるようになってほしい。自分自身を見つめ直し、自己を変容させることができるようにしたい。

## (2) 見通しと振り返りを大切にした授業づくり

ここで言う「見通し」とは、単元全体を見わたし、どのような学習をするのかを、子ども自身が把握することである。そのために、学年に応じて、内容、他者、目的、方法、場面、評価が意識できるような学習展開をおこなっていく。「振り返り」とは、自己の学びが学習前後でどのように更新されたかを意識するためのものである。

これまでの研究で、国語科の導入段階には、教材との出会いと、言語活動との出会いがあることが分かってきた。まず、子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫する。例えば、「たぬきの糸車」(光村図書一下)であれば、昔話を教室に置いたり読み聞かせをしたり、昔の民家や本物の糸車に触れさせたりする。子どもと作品との距離を縮め、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入にすることで、学習への関心意欲は高くなる。さらに、言語活動との出会いを工夫することは、子どもたちの学習意欲を喚起し、持続させるものとなる。ただ「『たぬきの糸車』を暗唱しよう」と言うのではなく、言葉だけで語られた民話を実際にきいて民話の世界を楽しむことで、「自分にもできるかな」「やってみたいな」とこれから展開する学習に対する意欲をもって臨めるようにする必要がある。

また、子どもたちが振り返りをすることができるようにするために、学びの足跡が見える工夫を大切にする。学習の終わりに書く振り返り作文、単元や授業の始めと終わりの音読を録音して聞き比べる、学習したことを教室に掲示するなど、学びの足跡を残して、自らの学習を振り返り、自己の変容を確かめる手立てを講じる。単元の終わりだけでなく、授業ごとの振り返りを大切にして、子どもが自分の学びをいつでもフィードバックできるようにする。

## 4. 研究の評価

1つの単元やそれぞれの授業において、発言やノート・ワークシートの記述内容などにより、現状把握、子どもの学びの変容を把握するよう努める。また、授業記録を取り、子どもたちの学びの実際をできる限り詳しく記述する。指導と評価が一体となるように、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて、長期的な成果と課題についても把握を行う。方法としては、一学期と三学期に行う同じ系統の単元同士の比較によって行うこととする。

学習課題が子どもたちにとって心弾むものになっていたのか。追究の質を高める問いであったか。子どもの発言に対して教師が出すぎていないか。以上のようなことを検証していく必要がある。子どもたち一人一人がどんな言葉を残しているのかを評価し、そこから子どもたち一人一人に合った指導の在り方を考えていきたい。

(参考文献) 鹿毛雅治(2007)「子どもの姿に学ぶ教師—『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』—」教育出版